
『純愛者』と書いて『ストーカー』と読む b y 俺

右下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『純愛者』と書いて『ストーカー』と読むby俺

【Nコード】

N9641J

【作者名】

右下

【あらすじ】

最近やたらと視線を感じる。しまいには、連日俺の家のポストに手紙まで投棄してくる始末。しかも『ストーカー』の女は、自分の事を『純愛者』とまでぬかしやがった。俺はどうすればいいんだ…？

はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。

俺は走っていた、僅かな光しか射す事の出来ない街灯が立ち並んでいる薄暗い夜道を。

春の夜は暖かい、確かにそうだ。

現に俺は今半そでのＴシャツを着用し、二の腕が随分と露出した格好だ。流石に汗は流れないが、長袖を着るのは少々熱い思ったから。

そして現在の俺はひたすらに走っている。

それも結構全速力で。

熱いとゆう理由で、半そでを着てきたのにも関わらず額には汗が滲みむ。

厳密に言つと、これは冷や汗とも言つ。

「はぁ・・・はぁ・・・何で、陸上部の俺が・・・はぁ・・・本気で走って・・・まけないんだよぉ！！！」

俺がこうして走っているのも、ちゃんとした理由がある。

別に俺が陸上部であり、夜の走りこみをしているわけではない。

コンビニの帰りに、後ろから誰かのを視線を強く感じたからなのだ。この視線には身の覚えがある。数日前から急に現れ、学校への登下校の時に感じたものと一緒だ。

さらには、連日俺の家のポストに無記名のラブレターらしき物が投稿されている。推測するに、現在俺に後ろから視線を放ち、ポストにラブレターを入れているのは同一犯だろう。

しかし、登下校の時にしか感じ無かったこの視線が、現に今何故か感じている。俺は少し心配になり、小走りで家へと向かおうとしたら、何と後ろにいる奴も歩くスピードを上げやがった。

そうして現在、最終的に全力で走る羽目になってしまったのだ。

「よし……あと少しで家だ……！」

俺は陸上部で鍛えた足の速さを使い、かなりの速さでコンビニから家へと帰宅した。

恐らく今タイマー測定をしていたなら、確実に自己ベストを大きく更新していただろう。実に惜しい。

恐る恐る玄関の扉を少し開け、外の様子を窺う。

そこには荒い息をたて、何とか整息している一人の女性がいた。

家の前には街灯が建っておらず、必然的に薄暗くて、その女性の姿は黒いシルエットでしか確認できなかった。

「はあ・・・はあ・・・はあ」

随分と息を切らしている。それもそうだろう、何せ俺は陸上部、しかもエースとしてみんなに慕われている。そんな男の全速力にここまでついて来たのである。しかも女性だ、まずあり得ない。

俺の『ストーカー』である事は間違いなさそうだ。うーむ、あの脚力、実に惜しいな。

そんな呑気な事を考えていた俺は、ハッ和我に返った。

そ、そうだった！今玄関を出れば『ストーカー』の正体分かるじゃないか。

だが、俺の両脚は俺の考えを聞かなかった。まるで肉離れでもしたのかのように、ピクリとも動かない。

まるで俺の本能が告げているようだ。

見てはいけないと。

もしかして俺、ビビっているのか・・・？

そして、俺がしごまごしている内に、女性はいつの間にかいなくなっていた。

「何なんだ・・・あいつは」

〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉

結局『ストーカー』の正体は分らずじまい。

俺はとぼとぼと学校へ向かうため、いつもの見なれた通学路を歩いていた。もはやお馴染みとなった視線を感じながら。

「はぁ・・・いつまで続くんだろうな・・・」

俺だって女性にもてたくない訳じゃない。

もし彼女が出来るなら、顔は綺麗ではなく、可愛い系の女性。贅沢を言うなら、性格も他人に思いやりがある、そんな人だったら最高だ。

仮に、後ろにいる俺の『ストーカー』が俺の要望通りの女性だったでしょう。だったら俺は、彼女の愛を快く受け取るだろうか？

否、そんな事はないと思う。

そんなコソコソと人の周りをうろつき、毎日のようにストーキングと手紙の不法投棄。ハッキリ言って迷惑以外の何物でもない。そんなに俺の事が好きなら、直接告白してきてほしい。

そんな事を考え、俺は段々と無意識にイラついていた。

俺は辺りを確認する。どうやら周りには俺と、後ろの『ストーカー』しかないようだ。

だったら好都合。俺は腹に思いつきり空気を吸い、大声と共に吐き出す。

「聞こえるか!!」
「ストーリーカー」
「女!」

反応はない、だが俺はおかまえなしに叫び続ける。

「そんなになあ！俺の事は気になるなら！今日の夕方俺の家の玄関まで来やがれ！！！」

ビリビリと空気が震え、俺は猛獣のように叫び終えた。

伝えたいことは言った、あとは相手の出方次第。

さて、学校へ向かおう。

と、思ったその時。周囲からクスクスと笑い声が聞える。

「ん？・・・げ！！」

どうやら俺の声は相当響いたらしく、俺の叫び声を聞いた人たちが様子を見に来たようだ。

俺は逃げるように、顔を赤らめながら、陸上部で培った足で学校へと走った。

きっと、今タイム測定をしていたら、昨日のベストを軽く更新していただろう。本当に惜しい事である。

§
§
§
§
§
§
§
§
§

特に時間を約束したわけではないので、俺は『ストーカー』が何時現れてもいいように、部活を早退し、一時間ほど前から玄関先の道

に立っている。

「そういえば、下校の時は視線は感じなかったな」

そう、珍しく下校の際『ストーカー』の視線は感じなかった。

はたして俺の想いが伝わったのだろうか？

その時。

「あ、あのお」

何ともか細い、弱弱しい女性の声が聞えた。

目をやると、そこには俺と同じ高校の制服を着た、一人の女子高生がいた。歳は恐らく俺と一緒に一個下の、結構可愛らしい女性だ。

「ん？ 何か用か？」

「えっと・・・そのお・・・」

何を恥ずかしがっているのか、もじもじとして声があまり聞き取れない。

「何だよ、言いたい事があるならハッキリ言ってくれ。そうした方が、俺もアンタも助かるだろう？」

「あ・・・はい。今日の朝、来栖君が『俺の家の玄関で待つ』と言っていたので、勇気を出して来ました」

「なんだ、その事が……って、お前が『ストーカー』か！！」

俺の大きな声に驚いたのか、彼女は一步後ずさっていた。

「す、すまん。で……やっぱりアンタが俺の『ストーカー』なのか……？」

「いいえ、違いますよ？」

「は?? 違うのか??？」

「はい、私『ストーカー』何かじゃないです」

堂々とハッキリ言った彼女は、最初にいた、あのか細い声を出す弱い女性とはまるで別人だった。

「私は来栖君の『ストーカー』です!!」

ピュルルルル。

漫画のように、俺たちの間に風が吹いた。

「待て待て待て。確認するぞ、アンタが最近俺につきまといっている女なんだな？」

「はい」

「アンタが最近、俺の家のポストに手紙を入れてるん奴なんだな？」

「はいはい」

「昨日夜、俺を走って追いかけてきたのもアンタなんだな？」

「はいはいはい」

「『ストーカー』じゃねーか！！！！！！！！」

今日一番のバカ出かい声を上げ、俺は半分激昂した。

「違いますって！！そんな陰湿で陰悪、陳腐で品位の欠片もない呼び名で私を呼ばないでください！！」

「何だと！！？ お前を『ストーカー』と呼ばずして、誰を『ストーカー』呼ぶんだ！？」

「ですから何度も言うように、私は『純愛者』であって『ストーカー』ではありません！！」

かくして、俺たちの言い争いは小一時間も続いたわけで、近所からは、俺の評判は著しく低下していた。

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

オマケとゆうか後日談。

今日もまた、後ろからあの視線を感じる。

あの小一時間も続いた俺たちの言い争いは、何故か俺がアイツと付

き合っ形で締めくくられた。

今でも何故そうなったかは分からない。ただ一つだけ分かる事がある。

それは。

俺が『ストーリー純愛者』の彼氏になったという事実だけだ。

（後書き）

何か感想、こうしたらよい、駄目だし、なんでも結構です。

何か一言下さると、とても幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9641j/>

『純愛者』と書いて『ストーカー』と読むby俺

2011年10月5日19時50分発行